

2015年12月12日

旭川市長 西川将人 殿

DOCOMOMO Japan 代表

松隈 洋



### 旭川市庁舎の保存・活用要望書

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築・環境遺産の価値を認め、その保存を訴えることを目的の一つとする、国際的な非政府組織 DOCOMOMO ( Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement : モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための組織 ) の日本支部です。

この度、旭川市庁舎の老朽化と耐震性の不足に伴い、立て替え計画が進められていると伺っております。旭川市庁舎は、日本における近代の重要な建築遺産と認識するところから、その保存について要望する次第です。

旭川市庁舎は、戦前から戦後にわたって早稲田大学で教鞭を執っていた建築家 佐藤武夫の代表作として知られています。佐藤武夫は、全国に多くの公共建築を設計した建築家であり、なかでも旭川市庁舎が最初に手掛けた市庁舎建築です。佐藤武夫は、旧制旭川中学校に籍を置いていたことがあり、その実体験から旭川市の風景に相応しいデザインを考え、旭川市庁舎を設計しています。また、2007年に歴史的、文化的価値が認められ重要文化財に指定された早稲田大学大隈講堂は、佐藤武夫が早稲田大学助教授時代に設計を担当したものであります。旭川市庁舎は、その建築史的な重要性によって、本会が2003年に選定した日本を代表する歴史的に価値がある近代建築の100選の一つに選ばれています。

耐震性の問題があるとお聞きしましたが、建物が果たす機能的側面だけでなく、建築がもつさまざまな価値に目を向け、旭川市庁舎の建物を現在の建築技術を駆使して保存改修しながら、新たな再生・活用方法についてご検討いただくお願い申し上げます。

この旭川市庁舎は、以下の点で保存すべき建物であると考えられます。

### (1) 20世紀の日本を代表する建築家・佐藤武夫の代表作品であることによる文化遺産としての評価

設計者である佐藤武夫(1899-72)は、父が軍人であったため幼少期に転勤を重ね中学時代に旧制旭川中学校に籍を置いていました。その後、佐藤武夫は、早稲田大学を 1924 年に卒業と同時に助教授となり、まもなく早稲田大学大隈講堂(1927 年竣工)の設計を担当します。また、この設計を通して音響学の重要性を感じ、音響設計の体系的な学問を始め、その先進的な研究によって学位を取得し、この分野におけるパイオニアとなりました。さらにこのとき、佐藤武夫によって日光東照宮の「鳴龍現象」が解明されたことが知られています。1957-59 年までは、建築学会長を務め組織の大改革を行ったといわれており、日本の建築業界にも貢献しました。全国にわたって多くの公共建築を設計した佐藤武夫は、国際様式としての近代建築の思想をそのまま持ち込むのではなく、多様な地域性を取り入れながら翻訳し、広めていった特徴を有しています。このように佐藤武夫という建築家は、戦前から戦後にかけて日本における建築文化の発展のなかで、きわめて重要な人物と言うことができます。

### (2) 近代市庁舎建築の展開において重要な建物としての評価

佐藤武夫は、旭川市庁舎を始めとして、新潟市庁舎、岩国市庁舎、矢板市庁舎、土浦市庁舎、大津市庁舎などの多くの市庁舎のほか、市民会館を始めとする多くの優れた公共建築を設計し、戦後の公共建築の礎を築きました。旭川市庁舎は、一連の公共建築における最初の作品であり、当時を代表する市庁舎群の原点のひとつとすることができます。美しいシルエットの塔部とそこに設けられた時計は、半世紀以上街のランドマークとなっていました。凍害対策として表面の凹凸を避け、雪解けによる汚れ防止のために水切りを大きく取るなど配慮された外壁や、さらに日本初の融雪装置を設けるなど、雪国ならではの技術的先駆性にも際立った価値が認められます。佐藤武夫は著作において、「半年ちかく灰色の空と一面の雪におおわれた世界の中で、小さな煉瓦造の建築などを見て通ることは、視覚の中で落とし物を見つけたように嬉しかった。旭川の市庁舎を設計するに当たって、わたくしはこの実感を最初に思いおこした。煉瓦を壁に使おうと心に決めたのである。それもコンクリートと煉瓦を交錯して鮮やかなチェック

の模様を、あの灰色の半年の空に聳立たせようと考えたのである。」と述べています。このように旭川市庁舎は、近代建築のテーマであったコンクリートの技術に、地域性を表現した人間的な温かみのある建物となっており、紋切り型になりがちな公共建築の発展のなかで、豊かな地域性をデザインに取り入れた近代市庁舎建築を実現させています。

### (3) 戦後の北海道を代表する建築遺産としての評価

佐藤武夫は、生涯において建築学会作品賞を二度も受賞しており、類いまれなる才能の持ち主だったということが伺われます。最初の受賞は、旭川市庁舎であり、二度目は1973年の北海道開拓記念館（札幌市）です。いずれも北海道における建築文化の形成に佐藤武夫が果たした役割が重要であることを示しています。また、旭川市庁舎の敷地は、旭川駅前から牛朱別川まで伸びる緑橋通りの都市軸上に位置し、旭川市民文化会館と広場を挟んで一体的な都市空間を形成しており、市街地に潤いある憩いの場を提供しています。この旭川市民文化会館は、米国の建築家フランク・ロイド・ライトの弟子として知られ、東京芸術大学で教鞭を執った天野太郎の設計によるもので、佐藤武夫の早稲田大学の後輩にもあたります。このようなかけがえのない文化遺産が、ここにしかないかたちで実現されております。これからも旭川市の歴史的、文化的シンボルに相応しいものとして価値が増していくものと考えております。以上のような貴重な文化遺産を、後世に継承していただけるような深甚なるご配慮を賜りたく存じます。

なお、本会は本建築の保存に関して、技術的支援など可能な範囲でご協力させていただきたく考えておりますことを申し添えます。

今後とも、この優れた由緒ある建築と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますようにお願い申し上げます。

敬具